

# 木暮足翁

寛政元年(1789年) - 文久2年(1862年)

木暮足翁の生まれた木暮家は、渋川村南横町(現・渋川市渋川(南町))に住み、代々与左衛門を名乗る本百姓で、馬問屋を兼ねていました。足翁は、木暮与左衛門の長男として、寛政元年(1789)に生まれました。諱を賢樹・克信、幼名を谷五郎、通称は五十槻、襲名して与左衛門を名乗り、号は梅屋、のちに足翁と改めました。

8歳のとき、折原に住んでいた渋川郷学の祖・吉田芝溪とその弟である吉田翠屏の私塾に入り漢詩文を学び、数多い門弟の中でも特に優秀でした。足翁は吉田芝溪に師事したほかに、和歌を屋代弘賢に、漢詩を遍照寺住職の周休(竹溪)に学び、これらの教えをもとに私塾を南横町に開き、子弟の教育にあたりました。この私塾からは、高橋蘭斎、堀口藍園、狩野利房等の立派な教育者が育ちました。

文政12年(1829)に妻を亡くした足翁は、翌年の文政13年(1830)に医者になることを志し、名医として有名だった紀伊国和歌山の華岡青洲に入門しました。また、蘭学者としても高名な高野長英とも交流を持ち、オランダ医学を学んだとも考えられます。

渋川に帰郷した足翁は、医者として開業するとともに、門弟への教育も行いました。また嘉永6年にペリー提督率いるアメリカ艦隊が来航した際は、開国を促す建白書を幕府役人に提出しました。

足翁は、文久2年(1862)8月26日に74歳で亡くなり、眞光寺境内万日堂西北の木暮家墓地に葬られました。



【市指定史跡 木暮足翁の墓(眞光寺)】

## 木暮足翁の略年表

西暦	和暦	年齢	できごと
1789	天明8 寛政元	1	渋川村南横町の本百姓で馬問屋を兼ねていた木暮与左衛門の長男として生まれる。諱を賢樹、幼名を谷五郎、通称は五十樹。はじめの号は梅屋。後に足翁と改める。
1796	寛政8	8	このころ、芝中の吉田芝溪・翠屏の兄弟に漢詩文を学ぶ。
1803	享和3	15	渋川の遍照寺住職となった周休から漢詩を学ぶ。 年代不明。江戸へ出て屋代弘賢の塾に入り国学と和歌を学ぶ。
1805	文化2	17	吉田芝溪に伴われ水戸藩に赴き藩主に調し和歌を数種供覧する。
1810	文化7	22	この頃、高崎藩士深井三右衛門の娘・か免と結婚する。か免との間には美津・秋太郎・新蔵・れんの二男二女が生まれる。
1811	文化8	23	5月、父の隠居により家督相続、与左衛門を襲名する。
1812	文化9	24	6月頃、父から相続した財産の全てを妹の婿養子幾太郎(後に与左衛門を襲名)に譲り渡す。隠居料としてか4反6畝6歩の耕地と屋敷並びに土蔵一軒を幾太郎から譲り渡される私塾を南横町に開き子弟の教育にあたり「横町の先生」と呼ばれた。この私塾から高橋蘭斎、堀口藍園、狩野利房などの教育者が育つ。
1829	文政12	41	愛妻・か免が子女を残して亡くなる。
1830	文政13	42	足翁の書による周休の漢詩集「竹溪小稿 初篇」発行。医師となることを志し紀伊国和歌山にあった華岡青洲の春林軒に入門する。 この頃、本居宣長の養子で和歌山に住居していた本居大平に国学と和歌を学ぶ。
			年代不明。高野長英と交流を持ちオランダ医学と世界の状況を学ぶ。
			医学を修めた後、渋川に戻り医者として開業する。
1849	嘉永2	61	日本で初めて種痘(天然痘の予防接種)が成功する。後に足翁も種痘を行っている。
1852	嘉永5	64	漢詩の師である周休が没する。
1853	嘉永6	65	浦賀にアメリカ合衆国のペリー提督率いる艦隊が来航する。 この頃、幕府役人に何回も開国を促す建白書を提出するも無視される。
1860	安政7 万延元	72	この年に多数の庚申塔が建立されるが能書家としても知られる足翁は近隣から記号を多数依頼される。
1861	文久元	73	元宿の吉田家の墓地に吉田芝溪と翠屏兄弟の顕彰碑を建てる(この年は吉田芝溪の没後50年にあたる)。顕彰碑は後に芝中に移設される。
1862	文久2	74	8/26 病にて没す。渋川の眞光寺墓地に葬られる。
1982	昭和57	—	5/15 没後120年。眞光寺墓地の「木暮足翁の墓」が旧渋川市の市指定史跡になる。

○年齢は数え年です。年代は前後することがあります

○主な参考・引用文献・・・『渋川市誌』、市指定史跡「木暮足翁の墓」説明文、品川鈴峰編『渋川の二大漢詩集 渋川の華』、『国史大事典』、大島史郎著『続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』

# 木暮足翁と渋川郷学

## 吉田芝溪・翠屏兄弟

木暮足翁の最初の師で「渋川郷学の祖」と呼ばれる吉田芝溪は、はじめ北牧宿の山崎石燕やまざきせきえんに学問の初歩を、後に昌平しやうへいこう覺の学頭を辞めた平沢旭山ひらさわあきざんに儒学・国学・詩文・農家経営・養蚕・産馬・開墾などを学んだ人です。

天明7年(1787)に中之町で私塾を開き、寛政5年(1793)に開拓のため弟翠屏らと芝中(現在の御蔭地区)へ移住した後も、多くの門弟を教育しました。

実学的で実践を重んじ、郷土に根ざした学問を説く。著書に、実体験を基とした農業指導書である「開荒須知」や「養蚕須知」などがあります。文化8年(1811)に芝中で没しました。

吉田芝溪の弟・翠屏も、兄とともに学び、共に開墾し門弟の教育を行う人物でした。翠屏は兄・芝溪に先立つ文化2年(1805)に芝中で没しました。

足翁が吉田芝溪に入門したのは寛政8年(1796)8歳の頃なので、芝溪は芝中に移住した後だと考えられます。

足翁は、吉田芝溪の学問をよく受け継ぎ、渋川郷学の学統を次の世代に受け渡す中心的な人物と考えられます。

足翁は二人の師を顕彰するために、芝溪と翠屏のこと、吉田家のことを記した顕彰碑を文久元年に元宿の吉田家の墓地に建てました。この顕彰碑は、後に明保野の芝中公園に移されました。

また芝溪と翠屏の墓を、芝溪の家族が建てたものとは別に、芝溪と翠屏が住んでいた屋敷跡のわきに建てています。



【吉田芝溪顕彰碑(芝中公園)】



【吉田芝溪(左から2つ目)と翠屏の墓(右)】

# 遍照寺住職 周休

木暮足翁の漢詩の師で渋川の遍照寺住職の周休(竹溪は号 無学は字※)も渋川郷学に連なる人物として取り上げられています。

周休は、安永4年(1775)に持柏木村(現・渋川市赤城町持柏木)で農業を営む草葉氏の三男として生まれました。幼いときに身体が虚弱となり、天明5年(1785)11歳の時に同村の極楽院西善寺に入り、剃髪※して周弁和尚につき仏道・学問を修業しました。また吉田芝溪・翠屏兄弟にも主に文章学を学んでいます。

寛政7年(1795)、22歳の時に江戸へ出て東叡山※学寮に入り8年間仏教や経史を学び、そして佐々木琴台に漢詩を学びました。周休は自伝(遍照寺の竹溪寿塔銘文で原文は漢文)に「仏典の外に各方面の学問も勉強したが、最も漢詩に熱心で多く作った」と記しています。

享和3年(1803)に帰郷し、翌年の文化元年(1804)に30歳で遍照寺の住職となりました。足翁が周休に漢詩を学んだのは、このとき以降だと思われます。

周休の詠んだ漢詩には、足翁に関するものが沢山あり9月に足翁と四万温泉に行ったことを詠んだ『暮秋拉致木暮賢樹再遊四萬温泉』や、水沢寺に遊びに行く途中の景色を詠んだ『初冬拉木暮生及童頭遊水沢山寺』など、足翁と周休が一緒に出かけた際の漢詩がいくつも残っています。また周休は、足翁の妻が亡くなったときに『悼木暮内人』を、足翁が医師となることを志して旅立つ際には『送木暮生西上』を詠むなど足翁の人生の節目にも漢詩を詠んでおり、とても親密な交際があったことがうかがえます。また文政13年(1830)に刊行された周休の漢詩集『竹溪小稿上編』は足翁の書によるものです。

周休は天保13年(1842)に68歳で遍照寺を退隠して石原の石原寺に移った後、中村の延命寺に移り、嘉永5年(1852)2月4日に78歳で遷化しました。

周休の漢詩の弟子の中で渋川郷学に関連する人物としては、足翁ほかには高橋蘭斎や堀口藍園がいます。

※ 字 日本で、中国の風習にならって文人、学者などがつけた、実名以外の名(コトバンク『精選版日本国語大事典』「字」の解説より引用)

※東叡山 上野寛永寺のこと

※剃髪 特に仏門に入って髪を剃ること(コトバンク『精選版日本国語大事典』「剃髪」の解説より引用)

## ○主な参考・引用文献

『渋川市誌』 『品川鈴峰編 渋川の二大漢詩集 澁川の華』 『大島史郎・著 続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』 『郷土渋川第9号 木暮達二 (協力 平沢文夫) 関係資料から見た木暮足翁交遊録その1 師先輩』

# 醫師を志した木暮足翁

木暮足翁が41歳の文政12年(1829)2月26日、愛妻・か免※が35歳という若さで亡くなりました。足翁は自身に医学の心得がなかったことを憂い、医学の修得によって人を救うことを志します。翌年の文政13年(1830)、42歳になった足翁は、か免の一周忌を済ますと、名医として名高い紀伊国和歌山の華岡青洲の家塾・春林軒に入門しました。

## ☆医学の師「華岡青洲」

華岡青洲は紀伊国(現在の和歌山県)出身で、古医方とオランダ流外科を学んだ医師です。内科も外科もともに一致して生体の理を究めるべきであるとする「内外合一活物究理」を主張し、広く民間療法も採用して和漢蘭折衷の医療を実践しました。また、接骨医が使用していた麻酔剤を改良して経口麻酔剤「通仙散」を創案し、文化元年(1804)にこれを使用して全身麻酔下での乳がん摘出手術を、世界で初めて成功させた、当時最高の外科医でした。

青洲は足翁入門の5年後の天保6年(1835)に亡くなりました。梶谷光弘氏の論文「華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3)」で翻刻された『青洲華岡先生門人姓名録』には、次のとおり他の上野国(現在の群馬県)の門人とともに、通称の「木暮五十槻」で記載されています。

全身麻酔による外科手術は、限られた弟子にしか伝えられなかったもので、足翁には伝えられなかったと考えられますが、足翁は優れた技術を取得して渋川に帰郷し、医者として開業しました。

○梶谷光弘「華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3)」より抜粋

		上野						
		安政三辰(年)	同五年六月	嘉永四年十月	同年	文政十三年月	文政五年	文化七年
同駒形駅		十一月十二日	同郡筑井村	勢多郡駒形宿	吾妻郡塚村	群馬郡渋川	勢多郡上増田村	前橋駒形駅
内田春斎			斉藤平庵	内田忠順	吉田忠徳	木暮五十槻	岡田敬輔	内田忠助

※か免 足翁の妻 高崎藩士 深井三右衛門の娘

○主な参考・引用文献 『大島史郎・著 続ふるさと渋川史帖 眞光寺の歴史と文化財を中心に』 / 『吉川弘文館 国史大事典』 / 『梶谷光弘・著 華岡青洲(3代随賢)末裔(本家)所蔵の国別門人録について(3) 日本医史学雑誌 第60巻第1号(2014)』